



公益社団法人 日本眼鏡技術者協会 会報

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会

〒532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原1-2-6 新大阪橋本ビル9F
TEL 06-4807-5070 FAX 06-4807-5009 <http://www.megane-joa.or.jp>

Vol. 157
2020年1月

発行人：木方伸一郎

編集人：杉本佳菜子

CONTENTS

●年頭所感	
「ちゃんとしたメガネを」に答える	木方伸一郎会長 2
●訃報	
大頭顧問が逝去	4
追悼「大頭先生のご逝去を悼む」	津田節哉顧問 4
●トピックス	
富士メガネがSDGs推進本部賞を受賞	5
平岩副会長が経済産業大臣賞を受賞	5
●誌上眼鏡学 連載9	
環境と眼鏡	内田豪専任講師 6
●寄稿	
眼鏡業界の未来に向けて SDGs 発進！	白山聡一理事 7
●国際部	
アジア太平洋オプトメトリー大会	国際部 林光久 8
●日本眼鏡学会 オープンセミナー	9
●議事報告	
通常総会（2019年6月19日）2019年度の事業計画・予算を審議	10
理事会（2019年10月23日）上期の事業計画・予算について承認	14
●ブロック会議	
東京・関東、中国、東海、九州、東北、北陸	16
●講師会、広報部会	18
●スクランブルコーナー	
木方会長がラジオに電話出演	19
支部活動報告	19
●編集後記	24



長崎県・めがね橋
撮影：小野明夫さん（神奈川県支部）



「ちゃんとしたメガネを」に答える

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会 会長

木方 伸一郎

「ちゃんとしたメガネ」とは

「ちゃんとしたメガネを作りたい」という人は、世の中に少なからずいらっしゃると思います。それに答えるのが認定眼鏡士であるべきです。では、生活者にとって「ちゃんとしたメガネ」とは、どういうものでしょうか？

まず、生活者ご本人が「ちゃんとしたメガネ」を作ってもらったと思ってもらえることが、もちろん大切です。それには、お客様と向き合って、一人ひとりに合わせる事が大切です。

一人ひとりに合わせる

昨年は、ラグビーのワールドカップが日本で行われ、期待以上の心躍る時を過ごさせていただきました。その中で国籍に関わらないワンチームとしての日本の大活躍に沸き立ちました。その躍進の要因のひとつに戦略のうまさがあったといわれています。日本チームは、得意とする規律を重視しながら、どの試合でも同じようにただ全力を尽くすのではなく、相手をよく研究し、分析し、その相手に合わせた戦術で勝負したところにあるといわれています。サモア戦にはサモアチームに対する戦略を、アイルランド戦にはアイルランドチームに対する戦略を貫きました。スコットランド戦では、予想された展開と違いましたが、すぐにそれに合わせた戦略に変え、成功しました。

メガネの調製に関しても、そのお客様の機能、性格、ライフスタイル、価値観などさまざまな個性を効率的に把握し、いろいろな角度から検討して、その人に合わせたメガネを調製し、喜んでいただくのが、私たち眼鏡技術者の生きがいだと思います。

私たち眼鏡技術者は大きな大会に向けての努力ではないですが、毎日毎日の一人ひとりのお客様との

出会いが本番です。眼鏡調製もオートレフや自動加工機などの進歩により、ある程度のレベルのメガネが誰にでも作ることができるようになりました。物販が実際の店ではなく、インターネットを通じてバーチャルな店で簡単にできる時代の流れはますます加速しています。その中で、お客様の心と向き合っ問題や悩みを聞き、今までのそのお客様との体験をふまえながら、そのお客様の重要度の順位を把握して、一緒に解決方法を考えていくようなスキルと知識がますます必要とされてきています。当協会では、最新のメガネに関する情報を提供するとともに、基礎知識をより確固たるものとするための知識の積み重ねやスキルアップをめざします。

眼科医の先生からも

「ちゃんとしたメガネ」は、お客様ご本人が満足するだけではなく、目の健康を考えた場合、眼科医や視能訓練士からみても、「ちゃんとしたメガネを作っている」と思われるように努めることも忘れてはならないと思います。

そこで大切なことは、医師による診断と治療の邪魔をしないで、より良い方向へお客様を促すことだと思います。眼鏡店での視力チェックは、じっと両眼やあるいは片眼ずつでしっかり見る機会を与えることとなり、眼の病気が早期発見されやすい場です。お客様に見え方の異変に気付いてもらい、眼科の診療を受ける気持ちになってもらうことが大事です。

また、視機能の発達段階の若年者は、視機能の正常な発達を考慮し、医学的見地からみた眼鏡処方が必要です。そのことを親御さんによく理解してもらい、適切に目の前に保持されるメガネを調製し、かけ具合調整などアフターケアをしていくのが、私たちの仕事です。

どこに行けば「ちゃんとしたメガネ」が作れるか

当協会のもうひとつの柱となる事業は、我々のこうした活動を生活者にもっと知ってもらう活動です。それについては、まず各地域における独自の活動に補助金をつけ支援しています。さらに、独自の活動内容についての情報交換をして、大きな輪とになっていくことを目標にしています。

鯖江市は、SDGs（エスディーゼーズ）の運動に積極的に参画しています。SDGs とは、Sustainable Development Goals の略で直訳すれば持続可能な発達のためのゴールということになります。SDGs は、2015 年に国連総会で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載されたもので、実現するための 17 の目標（ゴール）から構成されており、その中には、女性の活躍や環境問題などがあります。鯖江市では、2019 年 5 月からメガネの形をしたピンバッジが販売されており、17 色で構成され、右眼の上には、Think Globally（地球規模で考える）、左眼の上には、Act Locally（地方から行動を始める）と書かれています。そして、両眼を繋ぐブリッジの部分が女性の活躍を表す色となっています。こういった活動は、世の中の流れにも乗りながら自分たちの存在感を高めるという点でも、また全体を考えながら地方から行動を始める点でも大変興味ある動きです。

また、自主認定より、より公正な観点からの国家資格の方が、生活者からみて信頼度が増すと考えます。現在、眼鏡技術者国家資格推進機構を通じて生活者にとって必要な制度であることを訴えており、一日も早い実現を待ち望んでいます。そして具体化が進んでいくにつれ、当協会がその国家資格制度の試験機関となるように柔軟かつ大胆な組織改革を進めていきたいと思っています。

会員の減少の理由を探る

現在、残念ながら当協会の会員は少しずつ減少しています。どんな人が退会していくのか、またどう理由で退会していくのかを、いろいろな角度から分析しました。その中で一番気がかりなのは、若い世代の会員数の低下です。これから勉強して資格をとる人たちや資格があるのだけれど入会を躊躇している人々に、どうしたら魅力ある協会になるか皆

で考えていきたいと思っています。

会員の減少とともに気がかりなのが、眼鏡専門学校の生徒数の減少です。国家資格となれば、高校生が進路を決めるうえで、ひとつのプラス材料となることを願いますが、今の学校の体系が時代の流れに沿っているかも考える必要性があるのではないかと考えます。

国家資格への準備は、今、試験の作成の部分にしかかっています。技能検定試験準備委員会設置が、眼鏡技術者国家資格推進機構の総会で承認されました。学校協会と一緒に、眼鏡技能を実践する内容に即した試験内容を考えながら、今後の眼鏡技術者の教育体系についても将来を見据えて検討する機会になればと思います。

オプティカルアワード

メニコンの創業者である田中恭一氏は若い時代に眼鏡店で働き、自由な発想と斬新なアイデアで新しいデザインのメガネを世にだしました。このような現場からの生き生きとしたアイデアを今の時代にも促すことを目的とした田中恭一オプティカルアワード（仮称）を当協会は創設しました。売れる商品の発掘ではなく、生活者に寄り添う立場から、こういった人々にはこんな工夫があれば喜ばれるといったアイデアに対して賞を差し上げることにより、業界の活性化と生活者への認知度を高めようというものです。しかし、内閣府への申請をする話し合いのなかで当協会の定款変更が必要であるところのご示唆をいただきました。次の総会にそれを諮ってからスタートとなりました。もうしばらくお待ちください。

働き方改革

日本では、働き方改革が叫ばれ、有給休暇の取得や残業時間の軽減に取り組むことが急務です。公益社団法人として事務局の勤務状態にも目を向け、働き方改革に臨みたいと思っています。

おわりに

幸いにも、当協会には、エネルギーあふれ、やる気のある新しい力が芽生えてきています。彼らと一っしょになって、皆さんの声を聴き、生活者にとって役に立つ公益社団法人日本眼鏡技術者協会であり続けることを目指します。

大頭顧問が逝去

当協会顧問の大頭仁（おおず・ひとし）氏が、昨年（令和元年）9月30日、逝去された。享年87歳。告別式は、10月8日東京都日野市の桃源院で営まれ、当協会からは木方会長、津田顧問が参列した。

大頭氏は、早稲田大学理工学部卒業、同大学院理工学研究科修士課程修了。早稲田大学教授、同大学院院長、同大学名誉教授など歴任。また、文部省派遣によりウィーン工科大学に留学、同大学で工学博士学位を取得したほか、西ドイツやスウェーデン、アメリカをはじめ海外の研究所で客員教授等を務めた。

また、日医光の代表としてISO、JISの特別委員、また厚生労働省の薬事審議委員を務めるなど、光学分野（視覚など）の研究に力を注がれた。眼鏡関係では、早稲田眼鏡専門学校（現東京眼鏡専門学校）校長、日本眼鏡学ソサエティ（現日本眼鏡学会）理事長、さらに公的資格の確立に向けた活動として有識者懇談会委員、眼鏡技術者・認定資格制定委員会委員長、眼鏡技術者・資格制度推進委員会委員長、眼鏡技術者国家資格推進機構顧問、当協会理事および顧問など眼鏡技術者の公的資格や「眼鏡学」の確立にご尽力いただいた。

なお、教育研究の功勞により2011年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されている。



大頭顧問（2010年6月総会にて）

「大頭先生のご逝去を悼む」

津田節哉

私と大頭先生の「出会い」は今から40年以上前に遡る1976年7月号の雑誌「工業英語」においてであった。私はそのほぼ1年前に6年間の米国留学を終え、日本でのオプトメトリストとしての歩みを始めていたところで、同年1月にNHKのTV番組「メガネ再考」に出演しアメリカの眼鏡教育制度について紹介する機会を得たが、業界内外に賛否両論があり、オプトメトリー制度の導入は程遠いものと思われた。

その頃、上記「工業英語」で早稲田大学理工学部の大頭教授が「日本の眼鏡の販売には資格制度がなく、野放しの状態で、アメリカのオプトメトリー制度に見習うべきである」と述べておられることに驚くとともに勇気づけられた。その後、大頭先生は早稲田眼鏡専門学校の校長に就任され、私は（公社）日本眼鏡技術者協会の教育部長を経て、会長に就任。平成13年より「認定眼鏡士制度」を立ち上げ、学識経験者からなる「認定資格制定委員会委員長」に大頭先生にご就任いただき、民間資格ながら社会的

にも評価される制度として育て上げていただいた。

それと前後して、現在の日本眼鏡学会の前身である「眼鏡学ソサエティ」をも平成9年に立ち上げ、正に日本の眼鏡教育と資格制度の基礎を築くことに多大のご貢献をいただいたわけである。色々な困難にぶつかる度に、先生がどこまでも「二人三脚」でやっていこうと暖かく仰っていただいたお言葉を今も忘れることが出来ない。

平成23年には認定眼鏡士制度も10年を経過したから、これを国家資格にしようと提唱され、現在の「国家資格推進機構」を立ち上げられたことを見ても、先生の業界へのご貢献がいかに先を見据えたものであったかが改めて認識され、深甚なる感謝の意を込めて、衷心よりご冥福を祈り上げます。



富士メガネが「SDGs 推進副本部長（外務大臣）賞」受賞

当協会の金井昭雄副会長が代表取締役（会長兼社長）を務める株式会社富士メガネは、第3回「ジャパン SDGs アワード」において「SDGs 推進副本部長（外務大臣）賞」を受賞されました。

このアワードは、総理大臣を始め日本政府全閣僚からなる「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」が主催し、国連が提唱する SDGs 達成に資する優れた取組を行っている企業・団体等を表彰するもので、同社がこれまでに行ってきた、海外難民への視力改善活動の功績が高く評価され表彰されました。

表彰式は、令和元年12月20日に総理大臣官邸で行われ、安倍総理は冒頭のあいさつの中で「受賞された皆様は、SDGsの推進を通じ、豊かで活力ある未来をつくっていくトップランナーです。日本の民間によるSDGsの取組は、国連からも高く評価されています」と述べ、続いて「海外の難民への眼鏡の寄贈を長年続ける企業」と同社について紹介しました。



表彰状（上）と表彰式で安倍総理と並ぶ金井会長



平岩副会長が経済産業大臣表彰受賞

平岩幸一副会長が、全国中小企業団体中央会・都道府県中小企業団体中央会の主催する中小企業等協同組合法施行70周年に係る表彰で「経済産業大臣賞」を受章されました。

平岩副会長は、愛知県眼鏡小売商協同組合理事長を16年間務め、組合の運営・発展に務められており、今回協同組合等功労者としてその功績が認められました。

なお、2019年11月26日、ANA インターコンチネンタルホテル東京で中小企業等協同組合法施行70周年及び中小企業団体の組織に関する法律施行60周年記念式典において表彰式が行われました。





著者プロフィール

めがね技術コンサルタント
東京眼鏡専門学校非常勤講師
各種眼鏡技術セミナー講師

環境と眼鏡

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会
専任講師 内田 豪

今まで、様々な事柄を誌上眼鏡学でご案内してきましたが、私の担当は今回が最後になります。

さて、我々が眼鏡を調整する際には、お客様の眼鏡を使用する環境を良く聞き取る事が求められています。これは今に始まったことではないとはいえ、スマートフォン（以下、スマホ）をはじめ小型のデバイスが普及した現在では、お客様の視環境はとても複雑になっていますので、より詳細な聞き取り（眼鏡の使用目的）が必須になります。

図-1にスマホのデビューに関する調査を図示しました。東京都青少年・治安対策本部H30年度の報告書からの引用データを図版化したのですが、驚くことに小学生+中学生で大凡9割になります。

若い方々のほとんどはスマホをはじめとしたデバイスユーザーと考えても差し支えないでしょう。スマホの利用時間に関しても驚くべき数値が発表されています。文科省・厚生労働省の調査による高校2年生が休日に使用するスマホ利用時間ですが、6時間以上が2割近くになるとのことです。

昨今、若年者と眼位の問題がマスコミにも取り上げられていますが、スマホをはじめとしたデバイスの長時間視聴が何らかの影響を与えているのかもしれない。

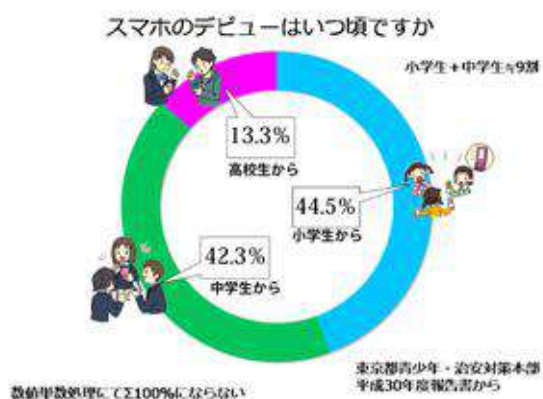


図-1 (スマホのデビュー)

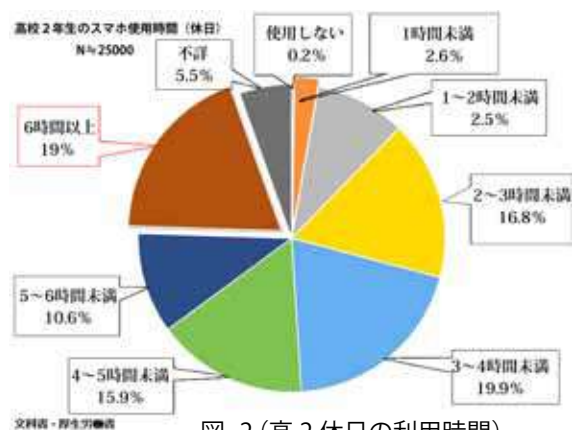


図-2 (高2 休日の利用時間)

れません。また、誌上眼鏡学ではコントラスト関連の解説も行いました。明暗環境が見え方に影響する内容でしたが、昼夜と別々の眼鏡を提供する眼鏡店も出始めています。暗い環境での自覚測定は工夫次第で解決が出来ます。インショップ型の店舗では難しいのですが、個人店では閉店時間を見計らって、店舗内の照明を落とすことである程度解決することがあります。もちろん、お客様とは来店時間を予約制にする事も大切です。

21世紀に入り、「眼鏡レンズ設計の多品種化高度化」や「レンズのインディビジュアル化」と、商品の選択肢が広がると同時に、利用者の視環境は複雑化しています。我々は眼鏡使用環境を詳細に聞き取りながら、希望に合致させるレンズ選択が求められるでしょう。

令和新時代、富士の高みを目指しお互いに研鑽に臨みましょう。



眼鏡業界の未来に向けて SDGs（持続可能な開発目標）発進！

公益社団法人 日本眼鏡技術者協会 理事
日本眼鏡関連団体協議会 SDGs推進委員長
白山 聡一



日本眼鏡関連団体協議会（日眼協）では、昨年 11 月に開催された通常総会に於いて SDGs を推進することを決議し、同時に SDGs 推進委員会を発足いたしました。当協会もこの日眼協の加盟団体でありますので、会員皆様には、SDGs へのご理解とご協力をお願い申し上げます。この度、当協会広報部のご好意により、日眼協 SDGs 推進・取組の説明をさせていただく機会を頂きましたので、以下に簡単に述べさせていただきます。

SDGs とは

2015 年に国連が採択した先進国を含む国際社会全体の 2030 年に向けた環境・経済・社会についてのゴールです。私たちの地球の全ての人たちが（包摂的）将来にわたって継続的に快適に暮らし続けられる（サステナブル）環境・社会をつくりましょう、といった大きな目標からバックキャスト思考で今を行動する、17 のゴールと 169 のターゲットを設けています。（詳しくはインターネットで検索してください）

なぜ今眼鏡業界に SDGs なのか

昨今の少子化超高齢社会による人材不足や消費者ニーズの多様化等により、私たち眼鏡店も売上拡大や事業継承に於いて課題を抱える事業者が多くあります。事業が将来にわたって継続し、より発展していくために必要となるのが、長期的な視点で社会のニーズを重視した経営・事業展開です。また、一方で、我々は常に、生活者に対しメガネを通じて QOL 向上を目指す事を目標とし、それは、一度のご来店、一個の眼鏡調製で終わることなく、そのお客様のその後の人生の QOV と共に長い時間のお付き合いを目指していますから、そもそも事業そのものが“サステナブル”型ともいえます。

いまやあらゆる業界で、経営リスクの回避と新たなビジネスチャンスを生み出して持続可能性を追求するためのツールとして、SDGs の活用が注目を集めていますから、眼鏡業界でも速やかに、これを取り組み、発信して、生活者に関心を持ってもらい、メガネの専門性や重要性、そしていかに我々が QOV に誠実な調製をしているかを知っていただくことが、業界の活性化につながると考えています。

鯖江の SDGs

メガネフレーム産地鯖江にある製造業団体、一般社団法人福井県眼鏡協会は、昨年より鯖江市と共に“めがねのまちさばえ”として SDGs に賛同し、「GOAL 5；ジェンダー平等」をメインに据えて、独自のメガネ型ロゴのピンバッジを製作し、その着用をもって、広くその意思を表明しています。日眼協も鯖江市の活動に参加する形で、国内全体の眼鏡業界に SDGs を推し進めていくことになりました。

日眼協のアクションプラン

では、実際の行動はどうするのか。日眼協としては、今年 3 月 8 日“国際女性デー”に向けて、加盟団体の事業所、店舗にポスターを配布しますので、その掲示のご協力をお願いします。その他、店頭スタッフに GOAL 5 のイメージカラーであるオレンジの小物やアクセサリを身につけて、接客していただくことや、あるいはお客様にオレンジカラーの小物を配布するなどのキャンペーンの協力を呼びかける予定です。

SDGs は、何よりも、メガネをモチーフにした SDGs ロゴ「まず自分から行動する」といった能動的、主体的なマインドセットが必須です。当協会会員の皆様にも、これを機会に是非 SDGs 志向へとご理解を深めていただき、できることから行動していただく事をお願い申し上げます。



第 22 回アジア太平洋オプトメトリー大会 (APOC)

国際部 林 光久

第 22 回アジア太平洋オプトメトリー大会 (APOC) は 2019 年 6 月 17 日から 20 日まで 4 日間にわたりアジア太平洋オプトメトリー会議 (APCO) とフィリピンオプトメトリー協会 (OAP) との共催で、フィリピンの首都マニラ、SMX コンベンションセンターで開催されました。

APOC はオプトメトリストによる地域社会への「ビジョンケアサービス」の向上を目指して、2 年に一度開催されているもので、今回のテーマは Optometry Refocused (オプトメトリー再フォーカス) でした。ここマニラは、1978 年に APCO の設立総会が開催された地です。大会には 29 カ国から約 500 名が参加しました。日本からは金井氏と私の 2 名でした。参加国は、日本、オーストラリア、バーレーン、バングラデシュ、ブルネイ、カンボジア、カナダ、中国、フィジー、香港、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、ミャンマー、ネパール、ニュージーランド、カタール、ロシア、シンガポール、南アフリカ、スリランカ、台湾、タイ、イギリス、米国、ベトナムでした。

大会は APCO 会長のピーター・ヘンディコット氏、フィリピン・オプトメトリー協会会長のレザ・バドン・タバサアレス氏、WCO 会長のスコット・マンドル氏、さらにフィリピン保健省 (Department of Health) のローランド・ドミンゴ氏の挨拶に続き、リボンカットセレモニーで始まりました。

学術プログラムは、K.B.Woo 記念講演として、香港のカーリー・ラム氏による近視進行抑制についての講演で始まりました。新しい近視コントロール用のレンズ (DIMS) (HOYA 製) を用いた臨床治験についての講演で、高い関心を呼んでいました。日本では発売されていませんが、レンズの表面に無数の 1 ミリ程度の小さいプラスレンズが配置されているものです。今回の APOC での学術プログラムには、近視抑制に関する話題が多かった印象があります。もうひとつの特徴は、IACLE (国際コンタクトレンズ教育者協会) が結構大きく絡んでいるようで、コンタクトレンズに関する話題もかなり多く講演され



APOC 新役員 (右から 3 人目が林氏)



金井当協会副会長と林氏

ました。もちろん、眼疾患などに関連する内容の講演も多数ありました。

フィリピンでは 10 時と 3 時にミリエンダと呼ばれるおやつの習慣があり、この大会中も会場内で提供されていました。

APCO の GDM (総会) は初日の夕方に開催されました。シンガポールから事前に多数の質問がインターネットで送られていたので、荒れる総会が予想されましたが、ピーター・ヘンディコット会長が上手く裁き、予想された混乱はありませんでした。また、APCO の事務局が 7 月 1 日をもって香港からオーストラリアのメルボルンに移転されることが正式に発表されました。任期満了に伴い改選された新役員は、オーストラリア、カンボジア、香港、インド、マレーシア、フィリピンの各代表で、日本からの私を含めて 7 人でした。

役員会議は 2 日目の昼に開かれました。これは特に会長、副会長と会計係を決めるためのもので、自薦・他薦とあり、若干難航しましたが、会長にピーター・ヘンディコット氏が再選され、副会長にカーリー・ラム氏、会計係にカルメン・アベサミス・ディチョソ氏がそれぞれ選ばれました。次回の APOC は、WCO (世界オプトメトリー会議) による WCO (世界オプトメトリー大会) の会期と競合しないように調整しようという意見があるため、現状、開催時期も開催国も未定です。なお、今大会のスポンサー企業は、エシロール、アルコン、ジョンソン & ジョンソン、トプコン、参天の各社でした。

今回のメインテーマは「眼鏡技術者の知識と技術の向上」

100 人が参加、ディスカッションも

日本眼鏡学会（魚里博理事長）は第 23 回オープンセミナーを昨年 10 月 9 日午後 1 時 30 分から、IOFT 会場近隣の TFT ビル東館で開催した。当日はメーカー、小売店の関係者ら約 100 人が参加。「眼鏡技術者の知識と技術の向上」をメインテーマに、講演およびシンポジウムがあり、議論を深めた。



セミナー会場

冒頭、魚里理事長が「日本眼鏡学会の前身である日本眼鏡学ソサエティー並びに本学会の初代理事長として多大な貢献をされた大頭仁先生が 9 月 30 日に逝去された」と報告、参加者一同で黙とうを捧げた。

今回のオープンセミナーは同会の教育・資格研究部会が主宰した。セミナーは 2 部構成。第 1 部は魚里理事長（医学博士、工学博士）が座長を務め、「円錐角膜の最近の話題－眼鏡技術者の方に知っていただきたいこと－」をテーマに、加藤直子氏（南青山アイクリニック 医師、医学博士）による特別講演を行った。加藤氏は円錐角膜の診断、視力矯正方法、角膜クロスリンク、これからの円錐角膜治療について詳説。さまざまな症例を示しながら「円錐角膜を早期に診断し、早期に治療することによって、その人は眼鏡で生涯日常生活を送ることができるようになる。現在、学校や職場検診などでは円錐角膜のスクリーニングが行われていない現状がある。眼鏡技術者に、円錐角膜という病気存在を知っていただき、特に 10 ～ 20 歳代の若い層での早期発見に協力いただきたい」とした。

休憩をはさんで第 2 部となり津田節哉氏（（公社）日本眼鏡技術者協会顧問）を座長に「教育と資格に関するシンポジウム」のタイトルで 3 題の基調講演とシンポジウムが行なわれた。

基調講演は、岡本育三氏（眼鏡技術者国家資格推進機構代表幹事）が「あるべき姿の国家資格制度」、木方伸一郎氏（（公社）日本眼鏡技術者協会会長）が「眼鏡技術者の生涯教育について」、内田豪氏（同教育部長）が「今年の実技生涯教育の実例から」を

テーマに、各 30 分の講演を担当した。続いて座長、基調講演発表者が登壇。眼鏡技術者国家資格推進機構が導入を目指す技能検定制度の必要性、学校教育の重要性、眼科医および視能訓練士と眼鏡技術者との連携などをテーマに議論を交わした。登壇者からは「現在の規制緩和の時代に新たな制度を設けるのはとても難しい環境にある。一方、国家資格化は多くの眼鏡技術者が必要だと認めている。ひとつの選択肢として技能検定制度が必要だ」、「眼鏡業界には公的な資格が必要である。技能検定制度をどうしても成就しなければならない」、「実技の教育を担当しているが、同じミスを繰り返す方がいる。その原因は、理論としての基礎がわかっていないこと。正しく理論を学んだうえで技術講習を受けると実技がよりわかる。基礎、理論をきちんと学び取ったうえで現場に望んでほしい」、「今後、視能訓練士や眼科医と眼鏡技術者が連携を図るうえで日本眼鏡学会の位置づけは非常に重要になる」などの発言があった。フロアから議論に参加した魚里理事長は「専門職を発展させていくためにもベースとなる学校教育の重要性を理解いただきたい」とした。最後に津田氏が「これからますます日本眼鏡学会が眼鏡業界の教育の主導者として活躍されることを願う」と話し、シンポジウムを締めくくった。

最後に、今年の年次セミナーで大会長を務める野矢正理事が「5 月 26 日に神戸市で開催する年次セミナーのテーマは『オリンピック・パラリンピックと眼そしてメガネ』。期待してほしい」とアピールした。

第9回 通常総会 報告

日時／2019年6月19日(水)
午後2～4時
会場／KKRホテル東京
出席／社員数110名中出席49名、
委任状提出61名、欠席0名



通常総会の会場

2019年度事業計画・予算を審議



あいさつする木方会長

木方伸一郎会長は「昨年の総会で任を受けた執行部が、慣れないながらもやってきたこの1年の報告をさせていただくので、審議をよろしくお願いする。今回の総会は講演会を実施せず、十分な説明と質疑応答の時間をとれる体制としたので、ぜひこの機会に色々なご意見、ご提案をお願いしたい。長年、事務局長を務められた塚田氏は今回が最後の総会となるが、当協会の財政状態の分析と改善提案をしっかりといただき、また公益社団法人としての内閣府との折衝にもご尽力をいただいた。今後は新しい執行部と新しい事務局長のもとで運営していくことになるので、皆様のご協力をいただきながら進めていきたい」とあいさつした。

【議事経過】



司会を務める山崎代議員

(1) 司会の山崎親一代議員(東京都支部)は、はじめに、この1年間に亡くなられた会員の方々のご冥福をお祈りするため黙祷を要請した。次に、本日の総会の定足数について、定款第18条の規程により社員総数の過半数(55名)以上の出席が必要であること、ならびに本日の出席状況として、出席予定者数49名中現在49名の出席に加え、委任状が61名提出されており、合計110名で社員総数の過半数以上の出席となるので本総会が適法に成立することを宣言し開会した。

(2) 木方伸一郎会長から開会のあいさつ(上記)

(3) 司会の山崎親一代議員は、議長の選出について諮ったところ司会者一任の声があり、亀井正美代議員(大阪府支部)を指名し、全員の拍手で決定した。

(4) 亀井正美議長は、議長就任のあいさつの後、議事録署名人の選任について本職よりの指名をもって決定したいと諮ったところ異議なしの声があり、鈴木利夫(京都府支部)、西田博之(大阪府支部)の両氏を指名し両氏はこれを承諾した。

議長は、第1号議案および第2号議案双方関連があるので、一括して議題にしたいと諮り、異議なしの声があり、直ちに一括審議に入った。

【審議事項】

第1号議案 2018年度事業報告承認

福田吉美総務部長は、総会資料の2018年度事業報告の各会議の開催状況、各部の事業活動および会員数等を読み上げて説明した。



議長を務める亀井代議員
(会員組織部長)

第2号議案 2018年度収支決算承認



説明する福田総務部長

平岩幸一財務部長は、総会資料の2018年度収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表等について詳細に説明した。亀井正美議長は、監査報告を要請。監事を代表して岡野雄次氏から4月17日に行った監査の結果について、いずれも正確かつ適正に執行されていることを認めたと報告した。

亀井正美議長は、第1号議案、第2号議案について質疑を求めたが、特に質問意見がなく、全員の拍手で承認された。

第3号議案 2019年度事業計画承認の件

福田吉美総務部長は、総会資料の2019年度事業計画について詳細に説明した。

第4号議案 2019年度収支予算承認の件

平岩幸一財務部長は、総会資料の2019年度収支予算について、記載の予算書の内容に加えて、前年度の当期収支差額8,538千円を活用した「累進屈折力レンズのデザインと隠しマーク集」の発行を含めて詳細に説明した。

亀井正美議長は、第3号議案、第4号議案について質疑を求めたところ、次の通り質疑があった。

（質問）事業計画と予算は、総会での決議を経て初めて有効となるはずなので総会に議案として提出する際には（案）として提示すべき。

（回答）また次年度からは総会では予算（案）として提示し、総会の決議後に（案）を削除する方向で検討させていただく。

（質問）総会の欠席者からは委任状をもらっているが、今後は委任状に加えて議決権行使書を提示する必要があるのではないか。また、財産目録で3つの口座の定期預金が1千万円を超えており預金保護がきかないので、リスク分散の観点から1千万円を限度に管理すべきではないか。

（回答）大切な財産なので、十分に配慮・精査をして対応していく。

亀井正美議長は、ほかに質問、意見がないことを確認し、第3号議案、第4号議案について承認を求め全員の拍手で承認された。

第5号議案 定款の一部変更の件

福田吉美総務部長は、総会資料の定款の一部変更（従たる事務所の抹消）について、その背景となった日本眼鏡技術専門学校の移転を含め詳細に説明した。

議長は、第5号議案について質疑を求めたところ特に質問はなく、全員の拍手で承認された。

【報告事項】

（1）教育部（内田豪教育部長）は、昨年の生涯教育でアンケートを実施し、その結果は今年の教育特集号にも記載しているが、講師陣にとっても非常に参考になった。今年度もアンケートを実施し、より内容の充実を図っていきたいのでご協力をお願いします。今年度の座学のテーマは「高齢者の快適な視力のための眼鏡調製」が120分、「眼鏡技術者のための眼科学『円錐角膜』」の2テーマ。実技講習会は11講座を準備したが、5番目の講座名は教育特集号に印刷したものから「メガネを快適に使用するためのトレーニング」に変更させていただき、ホームページにも改訂後の文言で掲載している。

（2）広報部（杉本佳菜子広報部長、小野明夫副部長）は、会報誌の発行時期を5月と12月から、今後は総会報告を掲載する7月と年頭所感を掲載する1月としていくと提案。また、今回初めて支部PR活動補助金制度を設けてエントリーを募集中なので積極的に応募してほしい。



報告する内田教育部長



報告する杉本広報部長

い。さらに、支部活動として広告を掲載する際には昨年度までの写真やデザインは著作権の関係で一切使えなくなったので注意をお願いします。必要な場合には本部に問い合わせをお願いします。

続いて、小野明夫広報副部長は、従来の2種類のリーフレットを統合した新しいリーフレットを教育特集号に同封してお送りしたので活用をお願いします。追加要望があれば100部までなら無料で対応する。昨年までのミニカレンダーについては色々な意見があるので一旦休みとし、その予算で支部PR活動補助という新しい試みをスタートさせたので、積極的に応募してほしい。

(3) 眼鏡技術者国家資格推進機構(岡本育三理事・眼鏡技術者国家資格推進機構代表幹事)は、技能検定制度導入には眼鏡製作のための業務分析と技能の区分、検定試験の受検者数規模の推定、指定試験機関になるための申請を行い指定を受けることが必要になる。業務分析と技能区分については作成が終わり、現在は語句の調整をしている段階。

検定試験の受検者数に関するアンケート調査は業界誌に対してプレスリリースを実施した。大手100社の内の54社から、また一般眼鏡店564社からの回答を得て、速報値ベースで推定すると、眼鏡業界には技能検定の対象となる人が約43,600人働いている。その中で1級が26,000人、2級が9,000人、累計で35,000人の受検希望者がいることが分かった。今後は、日本眼鏡技術者協会が指定試験機関になり得るための準備を進めていく。指定試験機関になるためには実技試験、学科試験について検定の基準、試験問題の作成、採点の基準、トライアル試験の作成と実施、運営体制の検証を行った後に事業計画案、収支予算案をつけて厚生労働大臣に提出する必要がある。今後は技術者協会側にも多くの作業が発生するが、着実に実行していく予定。試験実施後は、その合格者の多くが組織に加入することになると考えられ、これまでの日本眼鏡技術者協会の運営にかかわらない広く入会できるような組織に変えていく必要が出てくる可能性がある。

司会の山崎親一代議員は、全般にわたる質問を求めたところ、次の質疑があった。

(質問) 通信講座の受講者数は何人くらいか。教材のDVD製作費用がかかるという報告があったが、昨今は配信で受講できるものも増えており、その方が便利ではないか。また隠しマーク集についても冊子での発行は時代遅れでWeb化した方が良く考える。

(回答) 通信講座の数は総会議案書の10ページに記載している。種々の資料のWeb化については、そういう意見もあるが従来通りの方がいいという意見もあり、新しい時代に即したより効果的でコストの低い方法をバランスをよく見極めながら進めていく必要がある。

(4) その他

福田吉美総務部長が、表彰者に関しては、表彰規程および内規に従って3期6年以上支部長を務めて退任された6名の方々に感謝状と副賞を贈ると報告した。

また、来年の通常総会は令和2年6月18日(木)に大阪で開催する予定と報告があった。



報告する岡本理事

事務局長交代も報告

総会の席上、支部長交代の報告があった。2013年6月より事務局長となった塚田博氏が退職し、2019年10月から新事務局長として桐野伸隆氏が就任。それぞれ、退任、就任のあいさつを述べた。

《懇親会》



「アワードの件はもう少しのところと思う。また、資格制度は店のためではなく生活者のためで、それを国民の皆様に認めていただけるようになれば」と主催者代表のあいさつする平岩副会長



「来週は大阪サミットがあり、大阪は厳戒態勢となっている。来週の日眼連の総会をよろしく願います」と、来賓あいさつを述べる西村日本眼鏡販売店連合会会長



乾杯に先立ち「会員数が減少している。資格制度が進展すれば会員の減少も食い止められるのではないかと。協会の発展を祈念する」と述べる津田顧問



「資格制度は確実に前に進んでおり、世界のスタンダードも念頭におきながらいい資格制度ができるように動いている」と中締めの言葉を述べる岡本眼鏡技術者国家資格推進機構代表幹事

懇親会会場



懇親会の司会を務める小野理事

《感謝状贈呈》

感謝状贈呈者（今回は全員欠席）

坂本恒五郎氏（栃木県支部） 3.5期 7年
林 四郎氏（長野県支部） 6.5期 13年
釘宮輝善氏（大分県支部） 4期 8年
北出彌一郎氏（兵庫県支部） 14.5期 29年
吉永嘉男氏（山口県支部） 4.5期 9年
楠瀬剛志氏（高知県支部） 8期 16年

理事会 報告

日時／2019年10月23日(水)
午後2～4時
会場／ニューオーサカホテル
出席／理事総数25名中、出席21名、
欠席4名。監事2名中、出席2名
顧問1名、特別出席1名



理事会風景

広報部などから報告も 上期事業、決算について承認

理事会開会に先立ち、司会の福田吉美総務部長は「去る9月30日に亡くなられました当協会の顧問である大頭仁先生に哀悼の意を表し、黙とうを捧げたいと思います」と述べ、全員で黙とうを捧げた。



あいさつする木方会長

木方伸一郎会長は「上半期終了の理事会である。先般の台風19号による被害にあわれた地域の皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈りいたします。

大頭先生は10年近く病と闘ってこられた。若い理事は会った事がないと思いますので、簡単にご紹介をさせていただく。大頭先生は、早稲田大学の名誉教授で日本眼鏡技術者協会に対して津田顧問の良きアドバイザーであった。眼鏡学にはなくてはならない存在だった。教授は眼鏡レンズは進んでいるが、眼鏡士はもっと教育が必要だと言っておられた。先生との出会いは昭和46年、早稲田大学物理学科でのオリエンテーションで電磁光学の先生で光を研究されていた。電卓がない時代で光は色んな面で大事である。光で通信、エネルギーに使われる時代がくる。玉を転がす力は、動いていれば小さく、止まっていると大きな力が必要であると話されていた。

今、押していく時期に入っている。新しい時代に向けて、今までのことも踏まえながら新しい知恵をもって臨んでいきたいので、各部長の方々にはご苦勞をいただくが、理事の皆様にもどうぞ忌たんのないご意見をよろしくお願い申し上げます」とあいさつした。



司会を務める福田総務部長

【審議事項】

議題1. 2019年度上期事業報告ならびに収支決算報告の件

- ①福田吉美総務部長が事前配布資料に基づき、2019年度上期の事業内容について詳細に報告した。
- ②内田豪教育部長が事前送付資料に基づき、2019年度教育事業の詳細を報告した。
- ③平岩幸一財務部長が事前配布資料に基づき、2019年度上期決算の内容について詳細に報告した。
- ④岡野雄次監事が事前送付資料に基づき、監査結果について報告した。

(質問) 当期収支差額▲12,101,668円は多すぎないか

(回答) 隠しマーク集の作成が前期よりずれ込んだための8,332,200円と更新の3年周期



説明する内田教育部長



説明する平岩財務部長

で駆け込みの波があるためであり、半期の決算としては特に問題はない

木方伸一郎議長は、2019 年度上期事業ならびに上期決算報告全般について、意見・質疑を求めたところ、特に異議はなく全員の拍手で承認された。

【報告事項】

(1) 広報部報告

杉本佳菜子広報部長が当日配付資料に基づいて報告した。

(質問) 支部 PR 活動補助費で東京の活動費と奈良の交通費は問題ないのか。

(回答) 各支部での予算の範囲内で問題はない。

(質問) 富山県支部で認定眼鏡士の幟を作成したが認めてもらえるか。

(回答) 認定眼鏡士の認知のための活動であり何ら問題はない。



報告する岡野監事

(2) 眼鏡技術者国家資格推進機構の最近の動き

推進機構代表幹事の岡本育三理事が当日配付資料に基づいて報告した。

(3) オプティカル・アワード運営委員会

平岩幸一財務部長が当日配布資料に基づき報告した。

(意見) 選考委員会名簿の訂正について(岡本育三委員の履歴等)

(回答) 再度、経歴等を確認いたします。

(意見) 2 名の委員を推薦したい。

(回答) 後日、改めて検討させていただく。



報告する杉本広報部長

(4) 日本眼鏡士連盟の活動と収支状況について

日本眼鏡士連盟理事長の白山聡一理事があいさつしたあと、特別出席の日本眼鏡士連盟の神田幹雄事務局長が当日配布資料に基づき、政治資金パーティを含む活動や 1～9 月の収支について報告した。



報告する岡本理事

(5) その他

福田吉美総務部長が、①②について当日配付資料に基づき報告した。

①会員数ならびに認定眼鏡士登録者数／会員数 5,478 人、認定眼鏡士登録者 6,363 人(2019 年 9 月末現在)

②今後の会議日程(3 月 4 日の理事会を 5 日、4 月 15 日の監査会を 16 日に変更)



あいさつする白山理事

木方伸一郎議長は、ほかに質問・意見がないことを確認し、理事会を終了した。



報告する日本眼鏡士連盟
神田事務局長

東京・関東

2019年6月19日（総会開催当日）の午前11時からKKRホテル東京で東京・関東ブロック会議が開かれ、関東10名、東京7名、本部からは木方会長、塚田事務局長が出席した。

小野ブロック長が「数年前からこの会議は、協会の緊縮財政のもと、技術者協会が東京で行う総会に合わせて2年に1回の開催になった。短い時間ではあるが、各支部が抱えている問題点または本部への

要望等で、忘たんのないご意見をお聞かせいただきたい」、続いて木方会長が「本日の総会で眼鏡技術者国家資格制度推進機構の活動報告の時間を取っている。また、私の会長としての基本方針は教育である。同時に存在の意義を肌で感じていただくために広報活動が重要である。昨年杉本広報部長のもと、新しいメンバーが新しい考え方のもと取り組んでいる。令和の時代に相応しい政策を考えていきたい」と述べた。

議事では、①2019年度生涯教育・実技講習会②眼鏡技術者国家資格制度推進機構の活動③各支部から活動報告および本部への要望などについて報告と説明があった。

本部からは、塚田事務局長が杉本広報部長のもと今年度新設された「支部PR活動補助金制度」について説明し、制度ができた経緯、財源、利用できる条件、申し込み状況について述べ、「締切は7月末日だが、積極的なエントリーをお願いする」と呼び掛けたほか、7年ぶりに発行する「累進屈折力レンズのデザインと隠しマーク集(改訂版)」について説明した。

（写真は東京・関東ブロック会議）



訃報 依田秀穂氏（元山梨県支部長）が2019年9月19日逝去。85歳。依田氏は、平成14年度から同25年度まで山梨県支部長として当協会の運営にご尽力いただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

中国

2019年8月28日、ホテルグランヴィア岡山で中国ブロック会議が開かれた。出席は、辻ブロック長以下各支部長、本部からは塚田事務局長と後任の桐野氏の合計9名。なお、木方会長は大阪での生涯教育のため欠席となった。

はじめに辻ブロック長が、「岡山県南の近況、昨年7月の西日本豪雨で浸水や土砂崩れなどの大規模災害については一日も早い復興を望む。また、岡山県内の小学生は視力1.0未満が35%で過去最悪となった。5月に日本眼鏡学会の年次セミナーが岡山コンベンションセンターで開催された」とあいさつを兼ね報告した。

塚田事務局長および後任の桐野氏からのあいさつ。続いて、各支部から生涯教育開催や支部PR活動、地区眼科医会との関係などについて報告した。

本部事務局からは、中国ブロックの各支部の会員数推移、支部予算の着実な実行について、眼鏡技術者国家資格制度推進機構の現状とオプティカル・アワードの説明。地区眼科医会との関係、生涯教育アンケート結果などの報告があった。

（写真は中国ブロック会議）



東 海

東海ブロック会議が、2019年11月5日、岐阜羽島のホテル KOYO で、平岩ブロック長をはじめ支部の関係者、本部からは木方会長と桐野事務局長の合計15名の出席で開催された。

冒頭、平岩ブロック長からあいさつ、木方会長から桐野新事務局長の紹介があった。木方会長は、「当協会の事業は教育事業なので、今後とも充実させていきたい。PR活動の補助については認定眼鏡士を皆様に知ってもらいたい。眼鏡技術者国家資格推進機構の方も順調に推移している」と述べた。

広報部の支部PR活動補助、本部事務局からは東海ブロックの各支部の会員数推移、支部予算の着実な実行について、31年度上半期の決算報告、眼鏡技術者国家資格推進機構とオプティカル・アワードの報告があり、活発な質疑応答が行われた。各支部からは生涯教育の実施、支部PR活動、目の愛護デー、メガネの日などについて報告があった。次回は岐阜県支部が幹事の予定。

(写真は東海ブロック会議)



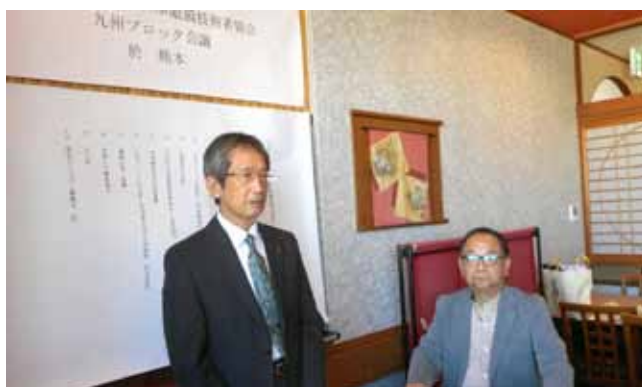
九 州

2019年11月6日、熊本市のワシントンホテルプラザで九州ブロック会議が開かれた。仲西ブロック長以下各支部の代表者、本部からは木方会長と桐野事務局長の合計15名が出席した。

清水佐賀県支部長から開会の言葉があり、仲西ブロック長があいさつを述べた。続いて、木方会長が桐野新事務局長を紹介したあと、「眼鏡技術者国家資格推進機構の方も順調に推移している。当協会の事業は教育事業なので、今後とも充実させていき、より実践的な内容にも気を配っていきたい。支部PR活動補助金について認定眼鏡士の名称を消費者の皆様に知ってもらうこと。今後の運営について皆様のご意見を伺いたい」とあいさつした。

本部事務局からは、各支部会員数推移、支部予算の着実な実行について、31期上半期決算報告。国家資格推進機構とオプティカル・アワードの報告があり、活発な質疑応答が行われた。各支部からは生涯教育、PR活動、10月の目の愛護デー、メガネの日のイベントなどについて報告があった。次回は大分県支部が幹事となる。

(写真は九州ブロック会議)



東 北

東北ブロックは、任期満了によるブロック長選出以外の大きな議題がないことから本年度は紙上での会議として新たなブロック長の選出をすることとなった。(2019年10月23日～31日実施、羽田ブロック長、各支部長および代議員3名の合計10名)

現ブロック長続投案に対して賛否を表明し、回収した賛否表を事務局で確認。全員が羽田ブロック長続投案に対して賛成を表明し、羽田ブロック長が令和元年・2年度の東北ブロック長に再選。なお、東北ブロック会議は当初から2年に一度の開催で、次回は2021年度となるが、国家資格制度問題等に急な展開があるなどの報告事項がある場合には、2020年度の開催を改めて検討する。

北 陸

北陸ブロック会議が2019年11月13日に金沢市のガーデンホテル金沢で開催された。西田ブロック長以下、各支部の代表者、本部から木方会長と桐野事務局長の合計12名。

春田石川県支部長の開会の辞、西田ブロック長のあいさつのあと、木方会長が桐野新事務局長を紹介した。続いて「今年も災害が多くお見舞い申し上げます。生涯教育は、これまで高度な内容としすぎた感もあるが今後はより実践的な内容にも気を配っていきたい。眼鏡技術者国家資格推進機構の状況は着実に前へ進んでいる」と述べた。

本部事務局からは、北陸ブロックの各支部会員数推移、支部予算の着実な実行について、さらに31年度上半期決算について報告した。眼鏡技術者国家資格推進機構とオプティカル・アワードについても報告があり、活発な質疑応答が行われた。

各支部からは、生涯教育の実施、PR活動や10月のイベントなどについて報告があった。次期ブロック長は新潟県支部の上田茂代議員を候補とし木方会長に一任することとした。来年は福井県支部が幹事となる。

(写真は北陸ブロック会議)



講師会

2019年12月4日、午後2時30分から新大阪ワシントンホテルプラザで講師会を開催、14名が出席しました。

まず、2019年度教育事業実績報告と反省点では、SS級認定眼鏡士試験、今年の生涯教育について、アンケート、その他認定講習会、教育部のアンケートについて各講師から報告や感想が述べられました。

2020年度年度の教育事業の方針については、事前の調整があり、内容・タイトル(仮)と執筆者が報告されました。「屈折異常と視力(仮)」(120分)、「眼科学(仮)」(60分)。また、実技講習会は、視力不良眼の眼鏡処方、眼位の測定手法あれこれなど11題を予定しています。詳細は、6月上旬に発行する教育特集号に掲載されます。

(写真は講師会)



広報部会

2019年8月22日、協会事務局で広報部会を開催、広報部および塚田事務局長、桐野次期事務局長が出席し、支部PR活動補助金申請の審査を行いました。

申請は16支部で、申請内容、必要経費と補助申請額を考慮し、一部申請額を修正し申請のあった全支部に補助を行うこととしました。なお後日、追加申請が1支部あり、補助を決定。

申請のあった17支部：青森県、秋田県、神奈川県、福井県、東京都、岐阜県、京都府、奈良県、和歌山県、岡山県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県

各支部へは、審査結果を通知し振込を行うこととし、10月の理事会および今後開催されるブロック会議でも報告をしていきます。このほか、各支部での広報手段、会報、HPについて話し合いました。



木方会長が IBS 茨城（ラジオ）に電話出演

2019 年 7 月 30 日、IBS 茨城放送の CONNECT というラジオ番組に木方会長が電話出演しました。

出演は、番組のコーナー「日本アソシエーション 図鑑」で、「〇〇協会」に着目し、その道の専門家としての思いや活動内容を掘り下げ、リスナーに興味を持ってもらおうというもの（コーナーは火曜日 18 時 15 分から約 10 分）。

パーソナリティーの Mic（ミック）さんは、まず協会の設立年や経緯、人数などを聞いたあと、メガネ製作や認定眼鏡士について次々と質問しました。以下は抜粋です。

木方会長は、「機械だけでもメガネは一応できるんです。でも、顔の形、使い方、見え方は違うので、その人に合わせなきゃいけない。どれだけ人工知能

が発達しても人に合わせるのは、人がやらなきゃいけない。目ではなく頭で感じるから、どこが心地いいのか。そこが一番難しい」、「幅広い分野の知識が必要になるし、毎年の生涯教育で勉強し続けないと、時代に合った知識にならないですね」などと答えました。

メガネ歴 20 年以上という Mic さんは、「職人ですね」「めっちゃわかります」と反応し、「メガネに愛情をもって携わってくださっている方がいるからこそ、安心してメガネが掛けられるんですね」と感想を述べました。

最後に Mic さんからリスナーにメッセージを促され「一生懸命勉強しておりますので、ちゃんとしたメガネを作りたい方は協会の認定眼鏡士のいる店にきていただきたい」と締めくくりました。

支部活動報告

“目の愛護デー・メガネの日” 関連などの支部活動

2019 年 11 月末までにいただいたご報告です
報告書は支部長へお送りしています

支部 PR 補助金を利用



東京都支部（山崎親一支部長）は、（公社）東京都眼科医会主催の目の愛護デーイベント「Tokyo Eye Festival」に東京眼鏡販売店協同組合とともに初めて参加しました。

10 月 12、13 日の予定でしたが、台風 19 号の影響で 12 日は中止、13 日は午後 1 時からの開催となりました。会場は、新宿駅西口広場の「ガラスの扉のイベント広場」で、メガネのクリーニング、掛け具合の調整、鼻パッドの交換、ナイロール糸の張替などを行いました。コーナーでは、東京眼鏡販売店協組などから 11 名が対応に当たり、来場者数は 140 名を超えました。

また、東京眼鏡販売店協同組合が主催する第 7 回めがね供養会に協賛。「10 月 1 日・メガネの日」の午前 11 時から東京都台東区の上野不忍池・辯天堂で、組合員や一般の方、組合員と取引のあるメーカーの有志の方を合わせて 50 名以上が参列し、約 1,600 本のメガネを供養しました。

今年は、会場にメガネを持参した一般の方が例年を上回る 27 名となり、総数 77 本のメガネをお預かりしました。

さらに今回は、めがね供養会プロジェクト委員会と青年部有志が協力し、専用ホームページを立ち上げたほか、各自の SNS を利用したり、マスメディア向けのプレスリリースを配信するなど、事前の広報活動に力を入れての開催となりました。





神奈川県支部（小野明夫支部長）は、10月1日、横浜駅東口SOGO前広場で「10月1日はメガネの日」のイベント（7回目）を開催しました。

天気に恵まれた当日は、開催時間の10時には多くの来場者がブースを訪れていたとのことで、およそ2000名以上が来場されました。

参加スタッフは交代制で40名で、メガネ相談、調整・クリーニングは人員を増やし対応。「残念ながらきちんとフィッティングがなされていないメガネが多く、せっかくの機能が十分に生かされていない」と感じたそうです。「お手入れのリーフレット」は分かりやすいと好評で300

部が半日でなくなりました。

初めての試みとして「テストレンズを用いて遠近両用・中近・近々両用体験コーナー」を設置したところ、遠近両用はほとんどのシニアが知っているか使っているとのことでしたが、中近・近々はほとんどの方がご存じないというのが現状だったそうです。多くの方が中近・近々が便利だと驚き、行きつけの眼鏡店からの提案がないと不満の声もあったということです。

「10月1日はメガネの日」のサブタイトルとして、「メガネで健康で若々しく」と掲げ、フレームコーディネーターによるメガネの選び方アドバイス、偏光・調光・遮光・ブルーカットレンズを紹介しました。さらに、子供向けに「動物の眼ふしぎ発見」と題し、草食動物と肉食動物の目の構造の違いなどが分かるよう模型を展示して説明をしました。

支部では、「過去6回の意見や反省を踏まえ、今年はより消費者のメガネに対する不安・不信・疑問を解消したい」と準備し、新たな取り組みを加えて、例年以上の来場者を迎えることができたとのことです。



福岡県支部（仲西隆義支部長）は、10月2日、福岡三越前ライオン広場で「10月1日は『メガネの日』」と題したイベントを開催しました。3回目となる今回は長崎県支部も協賛参加しました（下段）。

当日は、PR手提げセット（10月1日はメガネの日のロゴ入りメガネ拭き、同支部認定眼鏡士在籍店、認定眼鏡士のリーフレット、協賛メーカーパンフレットなど）を1,000セットを配布しました。メガネのクリーニングコーナーや相談コーナー、各メーカーの体験コーナー（ニコンエシロール：調光レンズ、東海光学：ルテイン

測定、セイコーアイウェア：紫外線対策・ブルーライトカット、HOYA：目の美容と健康アンケート、カールツァイス：VR）をはじめ、ヤブシタ九州販売、青山眼鏡が協力、体験特典としてブランドメガネケースを進呈しました。また、会場ではCutiePai まゆちゃんがMCで大いに盛り上げました。

この模様は、TVQ テレビ九州のニュースで紹介され、西日本新聞にも記事が掲載されました。



長崎県支部（中村尚広支部長）は、10月2日、福岡県支部の「10月1日はメガネの日」イベントに協賛参加しました。スープリームビジョンという機材を支部から持ち込み、体験希望者の動体視力を測定し、その結果を記入したリーフレットをお渡ししたそうです。リーフレットには、長崎県支部の認定眼鏡士在籍店、認定眼鏡士について記載しており、中村支部長によると「来場者の反応もよく、大変興味を持たれていた」とのことです。

また、昨年まで鹿児島県支部が作成していたポスターの支部名を長崎県支部に変更して、500枚作成し店舗で掲示してもらおうと支部の認定眼鏡士に配布しました。



福井県支部（赤松賢治支部長）は、10月19日、（公財）福井県アイバンク、福井県眼科医会主催の「目の愛護デー事業」に協賛、89名の方が来場されました。支部から理事5名と青山眼鏡から2名がメガネの洗浄、調整など、東海光学がルテイン測定をして、目の健康に関心が寄せられました。また、チラシ、支部の認定眼鏡士リストの入ったリーフレット（写真）、ティッシュ等を配布しました。

なお、7月3日に開催した生涯教育の様子が、4日付の福井新聞に掲載されました。赤松支部長によると「生涯教育開催の数カ月前に、産地のメガネを取材していた記者が来店。眼鏡技術者の団体があると説明したところ、後日実施した講習会の取材にきてくれました」とのことです。



高知県支部（谷村昌紀支部長）は、10月6日、高知市の中央公園北口前で、高知眼鏡商組合主催の「メガネのチェック＆チェック」に同組合員であり認定眼鏡士でもある10名が協力しました。なお、同所で高知県眼科医会による「目の健康相談」も同時開催されました。来場者は139人でメガネのチェック＆チェックには98人が訪れました。

「メガネクリニック」では、メガネの無料点検・クリーニング・ネジ入れ・相談などのほか、「メガネの日」や「目の愛護デー」の啓蒙としてチラシやセリート、ポケットティッシュを配付、周知を図りました。



熊本県支部（古賀寛治支部長）は、10月1日、手取天満宮で「メガネ供養祭」を執り行いました。

古賀支部長によると、支部役員がそれぞれの店のお客様から預かった古メガネを持参し供養、メガネへ感謝しました。

また、10月10日の熊本日日新聞には「大切なメガネ作りは有資格者に」「任せて安心の認定眼鏡士」「3年ごとに資格更新も」という内容で広告を出しました。

宮崎県支部（山口清一支部長）は、生目神社で10月10日午前10時10分（メガネにかけた日時）からNPO法人スローライフ宮崎主催の「めがね供養祭」に後援しました。今回は、関係者、一般の45名が参加し、メガネを供養。集まったメガネは、宮崎県支部、卸店、一般参拝者やNPO法人から計1,171個で、使用可能な618本を宮崎県ボランティア協会を通じタイに寄贈するそうです。

なお、当日の様子はNHK宮崎放送、MRTテレビ、宮崎日日新聞で報道されたとのこと。





鹿児島県支部（岡野和典支部長）は、10月7日付南日本新聞に、同支部として初めて新聞広告を出しました。

目の愛護デーの啓発と「大切なメガネは認定眼鏡士のいる店」という内容で、地域、店名、認定眼鏡士を掲載しています。発行数は30万部とのことです。



岡山県支部（辻戦三支部長）は、10月6日付の山陽新聞に広告をだしました。

広告は、カラーでサイズは6.2cm × 7cm。



岐阜県支部（堀江晃支部長）は、岐阜新聞に月極広告（1か月あたり3回程度の掲載で3か月契約、広告の空きスペースに掲載される。サイズは9.4cm × 6.6cm）をだしました。

堀江支部長によると「以前もだしていましたが資金の問題で近年は実施できませんでした。今回補助金でだしました。掲載回数は、新聞広告社の厚意によるため何回とはいえませんが、10月は6回掲載されました」とのことです。



秋田県支部（一ノ関勝義支部長）は、10月10日、秋田魁新報に目の愛護デーの告知と認定眼鏡士の支部の認定眼鏡士の店を掲載した広告（5段1/2）をだしました。



奈良県支部（森本勝支部長）は、10月1日付の奈良新聞に広告を掲載

しました。

また、10月7日には森本支部長と森田顧問が奈良新聞社を訪れ、同社の田中篤則社長と歓談、認定眼鏡士制度や世界の眼鏡技術者の資格について紹介しました。翌8日には、奈良新聞にその模様が掲載されました。さらに、11日には生涯教育の模様を報じる記事が掲載されました。



佐賀県支部（清水信弘支部長）は、10月10日付の佐賀新聞に支部の認定眼鏡士の紹介を含めた広告（半3段）を出しました。



青森県支部（羽田和弘支部長）は、青森県眼科医会の目の愛護デーに協賛、10月10日付東奥日報に広告をだしました。



和歌山県支部（山田稔支部長）は、新聞では10月10日に読売新聞に広告を出しました。ラジオでは、10月に和歌山放送で40秒1本、スポット広告20秒16本。さらに、同ラジオ番組の「ボックス」に出演し、当協会や認定眼鏡士、お店選びなどについて話をしたほか、パブリシティとして目の愛護デーや認定眼鏡士についてのお知らせが読み上げられました。

支部 PR 補助金なしで実施



大阪府支部（西田博之支部長）および大阪眼鏡専門小売協同組合は、10月13・14日にブリーゼプラザ小ホールで開催の「目のすべて展」（大阪眼科医会主催）に協賛しました。13日には日本眼鏡技術専門学校の辻一中央校長が眼鏡調整の重要性などの講演。来場者は両日で約520名となりました。

別室では眼科医による目の相談コーナー、また大阪眼鏡専門小売協同組合と当協会大阪支部による累進眼鏡・遮光眼鏡・拡大鏡の展示を行い、来場者からのメガネに関する相談も受けました。また、同所で大阪支部と大阪眼鏡専門小売協同組合による絵画コンクールも開催。本年は「メガネで始まるステキな出会い」と題し、絵画を展示し来場者による投票が行われました。投票は207票で、最優秀1点、優秀賞19点（うち日本眼鏡技術者協会大阪府支部賞10点）、秀作7点（うち同賞3点）が選ばれました。



北海道支部（中山勝弘支部長）は、4月7日、9月8日、札幌市手稲区の星置会館で約1時間にわたり講演、4月7日には82人、9月8日には83人の合計165人が参加しました。講師は同支部の中川明雄氏で、ブルーライトや目についてなどの内容で講演しました。主催する星置「寿会」は、地域の高齢者の生きがいと健康づくりや社会奉仕を行っており、「また機会があれば講演をお願いしたい」とのことで好評を得ています。



徳島県支部（相原雄二支部長）は、10月2日、葛城神社で第21回「メガネ供養」を開きました。徳島県めがね商連合会が作成した「使わなくなったメガネを再活用してみませんか」というリーフレットでメガネを通して社会貢献していることもアピールしました。

また、9月29日には日本眼科医会、徳島県眼科医会が主催する「目の健康講座」（市内ふれあい健康館）の会場入口で、メガネの洗浄および調整、上記のリーフレットの配布をしました。

京都府支部（鈴木利夫支部長）は、10月14日に京都府眼科医会が主催する目の愛護デーイベントに協力しました。会場には、約300名の来場者があり、そのうちメガネの相談に50名が訪れたそうで、支部では5名が対応に当たったとのこと。

なお、支部では3月までにPR補助金を利用した新聞広告を予定しています。



長野県支部（中澤國忠支部長）は、認定眼鏡士在籍店の店頭に設置してもらおうと「のぼり旗」を製作し、2枚ずつ配布しました。

のぼりは、幅45cm、長さ150cmで「メガネのご相談は認定眼鏡士®のいる当店へ」と大きく描かれています。



千葉県支部（板倉進支部長）は、昨年に続き認定眼鏡士の啓蒙用に使い捨てのアルコールの湿式レンズクリーナーを作製しました。

数が限られていること、また郵送料が多額になることから、3枚入りパックを7,000個を準備し、支部開催の生涯教育受講者に限り一会員60個を会場で配布しました。



岩手県支部（村上吉則支部長）は、10月10日付岩手新報に広告をだしました。

サイズは、11.6cm × 10.3cm で カラー。



兵庫県支部（北出彌一郎支部長）は、10月1日付の神戸新聞に広告（右下）を掲載しました。



三重県支部（岩佐正孝支部長）は、10月20日、津市の都シティ津で開かれた日本眼科医会、三重県眼科医会主催の目の健康講座に協力しました。

会場には320名が来場。支部が担当したメガネコーナー

には40名が訪れ、多くの相談に応じたほか、調整や洗浄などを行い、大変喜ばれていたということです。



近畿眼鏡協議会（近畿地区の眼専門組合などで組織）は、10月1日神戸市長田区の長田神社で第62回眼鏡感謝祭を挙行政。近畿地区の関係団体の代表、日眼連・メーカー、卸などが参集しました。（上記神戸新聞にも感謝祭について掲載）

編集後記

あけましておめでとうございます。令和元年は年間を通して皇室の伝統的な継承儀式が粛々に行われた一方、日本各地では豪雨災害に見舞われました。命の継承と災害からの復興。この国土風土ならではの連綿とした働きを改めて実感をする一年を過ごすことになりました。

広報部では公益を目的とする普及啓蒙活動に補助金を設けることが出来ました。17支部から申請があり、実施して頂きました。限られた予算と人員の中で、地域の眼科医の先生や他団体、また他支部との連携などもあり、認定眼鏡士が地域の生活者の皆様に認知され、関わる機会が得られました。今後も小さくとも各支部の活動が増えていくことを望んでいます。

今号で木方会長と白山理事が話題に取り上げ、富士メガネ様を受賞したSDGs。この取り組みを眼鏡業界としても推進していく体制です。日本は度重なる自然災害の復興を経験する中でインフラ整備に関しては国民全体に実績があるお国柄だと思います。SDGsが掲げる17の目標も身近な互助の精神と共に経験としてDNAに記録されているように思えるのです。

世の中では女性の社会性が様々な形で問題視されていますが、その人にとって優しい手段を選んで生きることが叶うように多様性を尊重しながら、自らの行動を考えて生きていきたいと思います。一人ひとりが自分を大切に考えて、全体を大切に考えて協力し合い、補い合いながら。

本年もよろしくお願いいたします。

（佳）

長崎県・めがね橋停留所 撮影：小野明夫さん

